
第 8 章 遅い小学生時代Ⅱ：1952 年夏 (15 歳)

フランス留学

1952 年のことであるが、ユーゴ先生は新聞記者のプーランさんと相談して、誰か生徒を一人フランスへ 3 ヶ月間留学させることに決めた。レイモン・プーランさんは、私が学校へ入った最初の年に、私たちの学校を取材しにきた『リヨンヌ・レプブリケンヌ』(Lyonne Républicaine) というフランスの新聞の特派員である。彼の記事と、彼の撮った写真は、その新聞に掲載された。プーランさんが私たちの学校にやってきた初日、ユーゴ先生は、こう言って彼を紹介した。

「新聞記者のプーランさんを紹介します。彼は私と同じオセール (Auxerre) 地方出身の友人です。」それに続けてプーランさんも挨拶した。

「皆さんは実に運がいい。ユーゴさんはとても誠実な人です。彼はオセールの名家の出な人ですよ。」

さて、フランスへ行く生徒の人選で、初め選ばれたのは、一番成績が良かったアーメッド・ベン・アブデルカデル・ベン・モクタルという (Ahmed Ben Abdelkader Ben Mokhtar) 生徒だったが、彼の両親は反対した。そのため、二度目の選抜が行われ、幸運は私の上にもたらされた。オセールの三つの家庭が、それぞれ一か月間私を受け入れてくれることになった。一つは、ユーゴ校長の従兄弟で、やはり名前をユーゴさんという人物の家、もう一つはシャンプーランの姉妹校の校長先生の家だった。三つめは他ならぬ新聞記者のプーランさんの両親の家と決まった。プーランさんの両親は、フランスでの 3 ヶ月目をリンドリィ (Lyndri) にある自分たちの大きな農場で過ごしたらいいだろうと勧めてくれたのである。アルジェリア南深部では夏休みは 5 月 1 日に始まるが、フランスではその後 6 月末まで 2 ヶ月間授業が続く。つまり、私はフランス到着後現地校のクラスに入って、フランス語を学ぶことが出来るのだ。色々日程の調整が行われ、出発の日時は 5 月初めと決定された。



イメージ画像：近年のインバルベル村の小学校。ハジ氏の子供ころの学校もこんな感じか。(2002 年訳者撮影) 大人たちの左端がハジ氏、その右隣が小堀巖教授。

両親を説得する

この千載一遇のチャンスをつかんだ時、私は法皇様になったような至福感を感じたが、実際には、まだ越えなければならない問題が一つ残っていたのである。つまり、いかにして両親を説得するかである。当時うちでは母が独りで、私と、5 歳年下の妹のゾーラの養育を一手に担っていた。父はアウレフから北西に 1000 キロも離れたケナドサ (Kénadsa) の炭鉱で働いていて、私たちに会いに帰るのは年に一度の休暇の時だけだった。父は、自分の不在中に何かを勝手に決めてはならないと、母にきつく言い渡していた。しかし、当時父と連絡を取るのとは容易なことではなく、私は、父がだめと言うのではないかと気が気でならなかった。私は色々頭を悩ませたが、一つの考えが閃いた。コーラン学校のタレブに頼めばいい！モハメッド・アブダラー・ブーカディ師なら、私の家族からとても尊敬されていて、彼の言うことなら両親も決して異を唱えたりしない。私はユーゴ先生に訴えた。ブーカディ師から私の両親に、フランス留学によって私を得るだろう経験の重要性を説明してもらったらどうだろうか。もしタレブを説得できたなら、全ては上手くいく。

「とても良い考えだ。大人でもなかなか思いつかない。」とユーゴ先生は言った。

ユーゴ先生は、自分に会いに来てくれるようブーカディ師のところに人を遣った。それは確か木曜日の午後のことだった。私もその場に立ち会ったが、ユーゴ先生とブーカディ師は、先生の家の居間で対面し、私が二人の通訳をした。

「この子はあなたの下で学んだのですね。」とユーゴ先生は訊いた。

「ええ」とブーカディ師は応えた。

「コーラン学校では真面目に勉強していましたか？」

「ええ、実に真面目でした。きっと、ここの学校でもそうだと思います。今日は、彼が何か助けを必要としていて、それで私が呼ばれたのですよね？どうぞ、何か私に出来ることがあれば、おっしゃってください。預言者も、ムスリムは同朋のために尽くすべき、と教えています。」

「彼が人生を成功裏に送れるようにしてやりたいとお思いですか？」

「もちろん。将来、彼が知識と徳の両方において私を越えるのを見るのが出来たら、どんなにかうれいでしょう！」

「この子は間もなく学校を出ていく年齢に達しますが、卒業証書を得るための試験に合格するには、是非とも彼をフランスへ遣り、フランス語のレベルを上達させてあげなければなりません。」

「私に何をせよとお望みですか？」

「彼がこのまたとないチャンスを逃さないよう、彼の両親を説得して頂けないでしょうか？」

「承知しました。彼のお母さんには会って話し、彼のお父さんには手紙を書きましょう。」

「時間はあまりないのです。父親には電報で知らせた方がいいでしょう。」

「分かりました。電報の文面を書いてください。そしてそれを私の名前で送ってくれば結構です。」

ユーゴ先生はブーカディ師に礼を述べた。私はといえば、羽こそなかったが、まるで空を飛ぶような心持だった。ブーカディ師は、一週間足らずの間に約束を履行してくれた。父からは、ほどなく許可の電報が届き、私の前に道が開かれた。

私は 1950 年に学校に入って以来 3 年間、あらゆる障害をものともせず勉強に励んだので、当時は CM 2 のクラスにまで進んでいた(初等教育の中級第 2 学年のこと。現在の学制では小学校の 5 年目で最終学年)。後は卒業試験が残るのみであった。もし 2 ヶ月間フランス本土の学校に通い、その後さらに 1 ヶ月フランス語だけの環境に身を置けば、私のフランス語の水準は相当進歩するはずである。そうすれば、1952-1953 年度の卒業試験を受けてきっと合格するだろうと思った。

長い長い旅路、まずアドラールへ

1951-1952 年の学年の終わり、私はアウレフを旅立つため入念な準備を始めた。フランスへ行くために、まず、正式の身分証明書が必要だった。これは、アウレフ駐留軍の主任軍曹で戸籍担当の書記官だったアリ・サヤー (Ali Sayah) さんが作ってくれた。実は彼も、私がフランスに行けるよう私の母の説得を試みてくれたのだった。彼は私が居る前で母に言った。

「このアウレフで一番の金持はトゥバック (Tobok) さんだが、もし彼が彼の息子たちに車か飛行機を買ってやりたいと思ったとしたら、彼は、その金があるのに、それを実行することをためらうと思いますか？」母は即答した。

「いいえ、手段があるのに、何を躊躇うことがあるでしょう。」

「じゃあ、彼が息子に知識を買ってやろうとしたら、それはできると思いますか？」母は応えた。

「まさか、それはお金では無理な問題です。」

「そうですとも。知識は、本人がそれを求めに行き、時間をかけて、それを吸収しようと

思わない限り、得ることのかなわないものです。だから、あなたの息子の望みを聞き入れて、旅立たせてやりなさい。後々あなた方は、きっとそのことを誇りに思うようになるはずです。」

アリ・サヤーさんは私に身分証明書をくれる時、一つ用事を頼んで来た。

「出発の前の晩に君に肉を預けるから、アドラールへ行ったら、エルメトゥケル (Elmetouekel) さんへ届けてもらえないかい？」

エルメトゥケルは、サヤーさんの義理の兄弟で、裕福な商人だという話だった。私は約束し、彼からヒツジの肉の詰まった袋を預かった。サヤーさんはこうも付け加えた。

「君は、アドラールに着いたら、次にコロン・ベシャルへの便が出発するまで、エルメトゥケルの家で休ませてもらうといい。心配しなくていい、彼の家族は親切だからね。」

出発の日には早朝 4 時に出立した。フランスへの長い長い旅が始まった。なお、旅程では、途中父の居るケナドサ (Kénadsa) に寄ることになっていた。ユーラン学校のブーカディ師が既に説得してくれていたもので、父は私を見ても怒ったりしないだろうし、またブーカディ師は念のため私に父宛の手紙を持たせてくれていた。家の者全員に別れを告げ、SATT という会社のトラックの荷台に乗り、沢山の貨物に挟まれて私は旅立った。この会社のトラックはアドラールやアウレフ、近隣の町々の間で、商品や旅人を運んでいた。私の乗ったトラックは、でこぼこ道をひた走った。とても疲れる旅立だった。私たちは途中、一夜を砂の上で野宿した。トラックは翌日 10 時ごろアドラールへ到着した。発着場でエルメトゥケルさんの店の場所を聞くと、その後ろだと教えられた。私は彼の家へ行き、サヤーさんから言われて来ましたと自己紹介したが、当のエルメトゥケルさんは黙って肉の袋を受け取り愛想の欠片もなかった。私は歓迎されていないと直ぐに悟った。エルメトゥケルさんは私に「何か飲むかい？」とさえ聞きはしなかった。次の目的地コロン・ベシャルへのトラックは夕方 4 時にならないと出発しないので、私は仕方なく彼の家の壁の日蔭に横になった。お腹が空いていたが、なすすべがなかった。正午ごろ、この店の店員がやってきて、私に 20 フランくれ、パンを買って食べるように言った。私は心の中で、これでは全くサヤーさんの話と違うじゃないかと毒づきながらも、心細くもあり、また実際空腹でもあったので、そのお金を拒否することはできなかった。

コロン・ベシャルから父のいるケナドサへ

同じ日の午後の 4 時ごろ、私は再び、コロン・ベシャルへ行くトラックの荷台の満杯の荷の間に体を滑り込ませ、アドラールを後にした。途中はずっと悪路で、トラックはゆっくりと進み、夜中近くになってやっと、工程の半分ほどのところにあるケルザズ (Kerzaz) へ着いた。乗客たちはトラックから降りて、それぞれ持参の食べ物を取り出して食べたが、中にはお茶の支度をする者もあった。その夜も砂の上で野宿となったが、乗客の中には旅慣れた者もあって、そういう者たちは毛布を持参しており、その上に横になりいくらかましな眠りをむさぼったようである。翌朝の朝まだき、一行は再び出発した。悪路の酷い揺れと砂埃ですっかり疲弊しながら、途中イグリ (Igli) とラーバドラ (Laabadla) を経由し、

一行はついに夕方の 5 時ごろコロン・ベシヤールへ辿り着いた。SATT 社の発着場でトラックから降りると、私は近くにいた一人の男の人に訊いた。

「シャーバ (Châaba) 地区へはどの道を行ったらいいんですか？」

「どの家を探しているんだい？」と、その男の人は聞いてきた。

「アドラールは初めてなんですけど、アウレフ出身のメリアム・ベント・アリ・ベン・ラクダール (Mériam Bent Ali Ben Lakhdar) という女の人の家族がうちの知り合いなんです。」

「ああ、君は運がいいね。その人は、うちの近所だよ。」と、その男の人は言って、メリアムの家の戸口まで連れて行ってくれた。

メリアムの家族は私の父と、とても懇意にしていたようで、私を温かく歓迎してくれた。私は救われた思いがしたものである。私は眠くて堪らなかったもので、横になろうとしたが、メリアムはそんな私を制して言った。

「ちょっと寝るのは待ちなさい。お腹がすいているでしょう？すぐ何か食べるものをもってきてあげるわ。夕飯まではとても待てないでしょう。」

彼女はすぐにデーツとミルクを持って来てくれ、お茶かコーヒーも要るか聞いてくれたが、私は要らないと断った。私は、一日の最後のお祈りをし、そして深い眠りに落ちた。夜の 8 時半ごろだったと思うが、私は再び揺り起こされた。中々目が覚めず、まだふらふらしていたが、私はメリアムの家族の夕飯の席に加わり、そこで私は皆から質問攻めにあつた。曰く、アウレフの私の両親は元気になっているか、今回は一体どこへいくのか、等々。ともかくその夜は平穏のうちによく眠れたので、翌朝は気分よく目覚めることが出来た。私が一日の始まりのお祈りをし、朝食を済ませると、メリアムは私を、コロン・ベシヤールとケナドサを結ぶ長距離バスの発着所へ送って行ってってくれた。そこで彼女は運よく、私の父を知っているという一人の男の人を見つけ、この子を頼む、くれぐれもこの子がお父さんに会えるまでどうか面倒を見てやってくれと頼み込んでくれた。道中この男の人が話してくれたところによると、父は今、無事に職にありついているとのことだった。父の居るケナドサは、コロン・ベシヤールの南西 22 キロに位置し、当時は石炭産業でとても栄えていた。目的地に着くと、私は真っ先にバスから飛び降り、教えられた方向に歩いて行った。父が私の方に向かって歩いてくるのが見えた。父は私を力いっぱい抱きしめた。その抱擁はあまりに強すぎて、私の足が宙に浮くほどだった。私は父のところで二晩を過ごした。